

第45回木村伊兵衛写真賞(主催・朝日新聞社、朝日新聞出版)は2年ぶりのダブル受賞となった。受賞したのは自らの義足と身体、制作したオブジェをテーマにしてきた片山真理(32)と、写真を構成するフィルムや用紙など物質的側面にフォーカスした作品を作ってきた横田大輔(36)という、独自の世界を追求する2人だ。(千葉恵理子)

木村伊兵衛写真賞

写真の「体」を駆使して表現



「Sediment」から

専門学校時代は「人が苦手」で「木ばかり撮っていた」という横田大輔。だが、知り合いの撮影会に参加するうちに人も撮るようになる。「行動範囲が広がり、周りの環境が変化することで自分の写真が変わっていった」。やがて、撮影したものを焼き付ける用紙などの支持体や、フィルム、乳剤など写真を構成するものに関心を抱くようになった。

横田大輔

よこた・だいすけ 1983年埼玉県生まれ。日本写真芸術専門学校卒業。2010年、写真「1_WALL」グランプリなど国内外で受賞。多くの写真集を発行している。



の出力用紙を山のように積み上げたインスタレーションを「写真集『Sediment』」と発表するなどしてきた。今回の受賞の対象となった写真集「Room.Pt.1」は「時」と「写真」がテーマだ。東京のラプホテルで撮った写真が、並べられたブラウン管に映る。数年ぶりに訪問しても内装も汚さも変わらず、取り残された場所だと感じたという。



「Room.Pt.1」から

「部屋にいと内省的になるといふか、記憶をさかのぼるような、脳の映像を見ているような気がする。暗い部屋で人は、現在ではない時間を見る。(暗箱の小さな穴を通して外の景色を映し出した)カメラ・オブスクラの、この部屋自体がカメラだと思った」と制作の意図を語った。

義足とオブジェと自分を残す

片山真理は写真以外にもオブジェ制作やモデル、歌手など活動の幅を広げてきた。「いま、改めて写真の面白さに気付いたところ。このタイミングでの受賞は本当につれしい」と言う。左手は生まれつきV字のようなく本指。先天性の疾患のため両脚は9歳で切断し、義足で生活を送る。学校になじめず、高校生の頃から描いた絵や作ったオブジェをSNSに投稿していた。それを目にとめた服飾の専門学校生にファッションショーのモデルになるように頼まれ、勧められて義足に絵を描くようになり、本格的な制作活動を始める。

片山真理

かたやま・まり 1987年埼玉県生まれ、群馬県育ち。東京芸術大学大学院修了。若手芸術家の登竜門「アートアワードトーキョー丸の内」で2012年のグランプリ。



当初、写真を撮るのは描いた絵やオブジェを人に見せたり、記録したりするためだった。だが、「カメラを触りだした頃から完璧な絵にならないういやだと思っていた」。部屋を作り込み、自作したオブジェと写る「マネキン」としての自分。「だから『自分をさらけ出した』ポトリーアの作家と言われることに違和感があった」。だが、認識が変わっていくことができあつた。香川の直島では他人の手を撮影してオブジェを作り、天候をにらみながら屋外で撮影した。「絵がまったくとコントロールできなくなった。それがすごく面白くて」。2017年には娘を出産。すごいスピードで成長している。



bystander #023 2016



cannot turn the clock back #001 2017

「この世界は本来、すごく美しいと思っている。それを写し出せるかもしれない手段である写真に、希望を持っています」

独自の世界追い求め

美意識と実験的作風を評価 選考委員

選考委員の石内都は「毎秒変化し、自分でコントロールできない不自由な肉体の中に精神という自由がある。片山さんの作品はその二つのせめぎ合いを彼女の美意識を持って表現している」と評した。また平野啓一郎は横田について「多彩な実験的な作風で、誰もが気軽に写真を撮り得る今日、その可能性をひたすらに拡張しようとする試みを評価した」とした。

もう一つの受賞対象である展示「The Second Stage at GG #50 横田大輔展『Room.Pt.1』」は「時間と写真」がテーマだ。東京のラプホテルで撮った写真が、並べられたブラウン管に映る。数年ぶりに訪問しても内装も汚さも変わらず、取り残された場所だと感じたという。